

日本の小型鯨類調査・研究についての進捗報告
2006年5月から2007年3月まで（統計データは2006暦年）

とりまとめ

岩崎俊秀

独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所
〒236-8648 神奈川県横浜市金沢区福浦 2-12-4 中央水産研究所駐在

本報告は、2006年の小型鯨類漁業及び2006年5月から2007年3月までの期間の遠洋水産研究所（以下、遠洋水研）及び日本国農林水産省水産庁（以下、水産庁）が他の機関と協力して実施した調査・研究を取り纏めたものである。本報告は、第58回国際捕鯨委員会科学委員会会合（以下、IWC/SC）に提出した“JAPAN PROGRESS REPORT ON CETACEAN RESEARCH, May 2006 TO March 2007, WITH STATISTICAL DATA FOR THE CALENDAR YEAR 2006”に取り込まれなかった小型鯨類についての情報を含んでいる。

1. 対象とした種及び系群

遠洋水研及び水産庁は次のような種及び系群の小型鯨類を調査・研究した。

| 標準和名 | 学名 | 海域/系群 | 関係する項目 |
|---------|-----------------------------------|------------------|---|
| イシイルカ | <i>Phocoenoides dalli</i> | 太平洋沿岸、オホーツク海、日本海 | 4.2, 6.1, 6.2.1, 10.1 |
| スナメリ | <i>Neophocaena phocaenoides</i> | 日本沿岸 | 2.1.1, 4.2, 4.3, 6.2.1, 6.2.3, 10.1 |
| カマイルカ | <i>Lagenorhynchus obliquidens</i> | 太平洋沿岸 | 6.2.1, 3.1.2, 4.1, 6.2.3 |
| スジイルカ | <i>Stenella coeruleoalba</i> | 西部北太平洋 | 4.1, 4.2, 4.4, 6.1, 6.2.1, 10.2 |
| マダライルカ | <i>Stenella attenuata</i> | 太平洋沿岸 | 4.1, 4.2, 4.4, 6.1, 6.1.2 |
| ハンドウイルカ | <i>Tursiops truncatus</i> | 太平洋沿岸、東シナ海 | 2.1.1, 4.1, 4.2, 4.3, 6.1, 6.2.1, 6.2.3, 10.1 |
| ハナゴンドウ | <i>Grampus griseus</i> | 太平洋沿岸 | 2.1.1, 4.2, 6.1, 6.2.1, 6.2.3 |
| コビレゴンドウ | <i>Globicephala macrorhynchus</i> | 西部北太平洋、東シナ海 | 2.1.1, 4.2, 4.4, 6.1, 6.2.1, 6.2.3, 10.2 |
| オキゴンドウ | <i>Pseudorca crassidens</i> | 太平洋沿岸 | 4.1, 4.2, 6.1, 6.2.1, 10.2 |
| ツチクジラ | <i>Berardius bairdii</i> | 太平洋沿岸、日本海、オホーツク海 | 2.1.1, 3.1.3, 3.2, 4.2, 4.4, |

| | | | |
|---------------------------------|---|-------------------|---------------------------|
| | | | 6.1, 6.2.1, 10.1, 10.2 |
| いるか漁業又は小型捕鯨業操業中に捕獲又は発見されたその他の種類 | - | 太平洋沿岸、日本海、オホーツク海 | 2.1.1, 4.3, 6.2.3 |
| 目視調査中に発見されたその他の種類 | - | 西部北太平洋、オホーツク海、南半球 | 2.1.1 |
| 座礁・漂着したその他の種類 | - | 日本周囲 | 6.2.1 |

2. 目視データ（このセクションは SC/59/Japan /Progrep. の目視データのセクションの記述と一部重複する）

2.1 フィールドワーク

2.1.1 組織的調査

遠洋水研及び水産庁は、財団法人日本鯨類研究所（以下、日鯨研）などの科学機関と協力して北太平洋において調査船による目視調査および関連調査を調査船によって8件、航空機によって1件実施した。全ての調査船には鯨類観察台（top barrel）が装備されていた。これらの航海においては小型鯨類を含む全ての目視記録が記録された。

| 対象種 | 期間 | 海域 | 発見群数 | 担当者(担当機関)および文献 |
|-------------------|-------------------|--------|------|-----------------------|
| ナガスクジラ | 18-28/06/06 | 日本海 | 14 | 宮下富夫（遠洋水研）、SC/59/NPM3 |
| | 21/07/06-13/10/06 | 西部北太平洋 | 1 | 島田裕之（遠洋水研） |
| ニタリクジラ | 21/07/06-13/10/06 | 西部北太平洋 | 3 | 島田裕之 |
| ザトウクジラ | 18-28/06/06 | 日本海 | 2 | 宮下富夫、SC/59/NPM3 |
| ミンククジラ | 18-28/06/06 | 日本海 | 59 | 宮下富夫、SC/59/NPM3 |
| | 21/07/06-13/10/06 | 西部北太平洋 | 5 | 島田裕之 |
| マッコウクジラ | 21/07/06-13/10/06 | 西部北太平洋 | 67 | 島田裕之 |
| | 18-28/03/07 | 西部北太平洋 | 4 | 島田裕之 |
| ツチクジラ | 11/05/06-09/07/06 | 日本海 | 45 | 南川真吾（遠洋水研） |
| 北方型コビレゴンドウ（タツパナガ） | 14/09/06-13/10/06 | 西部北太平洋 | 20 | 宮下富夫 |
| 南方型コビレゴンドウ（マゴンドウ） | 21/07/06-08/09/06 | 西部北太平洋 | 29 | 島田裕之 |
| ハンドウイルカ | 21/07/06-08/09/06 | 西部北太平洋 | 22 | 島田裕之 |

遠洋水研、高知県及び土佐湾ホエールウォッチング推進協議会（以下、協議会）の共同調査として、協議会に所属する30隻のホエールウォッチング船を用いて、2006年7月と8月に土佐湾西部沿岸域においてニタリクジラの目視調査が実施された。これらの船（5-10トン）は、専用の観察台（top barrel）を持たず上表には示されていないが、沿岸域での目視調査に使用された。調査は7月と8月に各5日間行われ、木白（遠洋水研）と9名の補助調査員及び延べ30名の漁業者（協議会メンバー）が乗船調査員を務めた。調査中にマイルカ属鯨類20群（1,395頭）とハナゴンドウ8群（64頭）を記録した。

スナメリの資源量と分布に関する情報を得るため、東～中部瀬戸内海において航空目視調査を実施した（使用機材：セスナ172P型小型飛行機）。吉田と南川が東京海洋大学、長崎県水産部とともに、宮島水族館の協力をえて調査を行った。2006年11月29日から12月5日の1週間のうち天候の良い4日間を選び調査を実施し、計987.6海里を探索する間に51群84頭のスナメリを発見した。他に種不明イルカ類1群20頭を発見した。

2.1.2 組織的調査以外の目視データ

小型捕鯨業といるか漁業において、漁場内における主として対象種の発見に関する情報を操業船から収集した(例えば太地沖では、オキゴンドウ、マゴンドウ、ハナゴンドウ、スジイルカ及びマダライルカ)。

3. 標識データ

3.1 フィールドワーク

3.1.1 自然標識データ

小型鯨類については、2006年5月から2007年3月までに自然標識データは得られていない。

3.1.2 人工標識データ

野路及び蛭田(両名、水研センター)はくろさきによる調査航海において“ダートタグ”による標識を行い、カマイルカ2頭の標識に成功した。

3.1.3 テレメトリーデータ

南川及び川島(水研センター)は日本海において空気銃を用いてタグ(深度・温度のデータロガーとアルゴス送信機を内蔵し、先端に銚先を備える)を4頭のツチクジラに装着した。これらのタグは一定時間後にクジラから切離され、2頭からデータの収集に成功し、それぞれ7日間と5日間の潜水深度時系列データを得た。

3.2 解析及び技術開発

南川は、空気銃を用いたツチクジラへのデータロガー装着システムにさらに改良を施した。このシステムはツチクジラの潜水行動データの取得に使用された。

4. 収集した組織・生物学的試料

4.1 バイオプシーサンプル

| 種類 | 海域/系群 | 期中の試料数 | 保管(Y/N) | 分析試料数 | 保管試料数 | 照会先 |
|-------------|-------|--------|---------|-------|-------|------|
| カマイルカ | 北太平洋 | 3 | Y | 0 | 3 | 遠洋水研 |
| スジイルカ | 北太平洋 | 2 | Y | 0 | 2 | 遠洋水研 |
| マダライルカ | 北太平洋 | 8 | Y | 0 | 8 | 遠洋水研 |
| ハンドウイルカ | 北太平洋 | 3 | Y | 0 | 3 | 遠洋水研 |
| オキゴンドウ | 北太平洋 | 1 | Y | 0 | 1 | 遠洋水研 |
| 種不明マイルカ科鯨類* | 北太平洋 | 1 | Y | 0 | 1 | 遠洋水研 |
| シャチ | 南極海 | 1 | Y | 0 | 1 | 遠洋水研 |

*: ハンドウイルカあるいはカズハゴンドウと考えられる。

4.2 漁獲又は混獲に由来するサンプル

| 種類 | | 海域 | 組織の種類 | 個体数 | 保管(Y/N) | 連絡先 |
|-------|----------|------|--|-----|---------|------|
| イシイルカ | イシイルカ型 | 北太平洋 | 歯(To)、皮膚、肝(L)、乳腺(M)、卵巣(O)、子宮角(U)、精巣(Te)、胃内容物(St) | 99 | Y | 遠洋水研 |
| イシイルカ | リクゼンイルカ型 | 北太平洋 | To、Sk、L、M、O、U、Te | 18 | Y | 遠洋水研 |
| スジイルカ | | 北太平洋 | To、Sk、M、O、U、Te | 467 | Y | 遠洋水研 |

| | | | | | | |
|---------|-------|--------|---|-----|---|------|
| マダライルカ | | 北太平洋 | To、S、M、 O、U、Te | 209 | Y | 遠洋水研 |
| ハンドウイルカ | | 北太平洋 | To、Sk、 M、O、U、 Te、St | 460 | Y | 遠洋水研 |
| ハナゴンドウ | | 北太平洋 | To、Sk、 L、M、O、 U、Te、精 巢上体 (E)、脊椎 骨(V) | 309 | Y | 遠洋水研 |
| オキゴンドウ | | | To、Sk、 M、O、U、 Te | 30 | Y | 遠洋水研 |
| コビレゴンドウ | タツパナガ | 北太平洋 | To、Sk、 L、M、O、 U、Te、E、 V | 7 | Y | 遠洋水研 |
| コビレゴンドウ | マゴンドウ | 北太平洋 | To、Sk、 L、M、O、 U、Te、E、 V | 119 | Y | 遠洋水研 |
| コビレゴンドウ | マゴンドウ | 東シナ海 | To、Sk、M | 8 | Y | 遠洋水研 |
| ツチクジラ | | 北太平洋 | To、Sk、 L、M、O、 U、Te、E、 V | 51 | Y | 遠洋水研 |
| ツチクジラ | | オホーツク海 | To、Sk、 L、M、O、 U、Te、E、 V、St | 2 | Y | 遠洋水研 |
| ツチクジラ | | 日本海 | To、Sk、 L、M、O、 U、Te、E、 V | 10 | Y | 遠洋水研 |
| スナメリ | | 東シナ海 | Sk | 1 | Y | 遠洋水研 |

小型捕鯨業におけるツチクジラの年間捕獲枠は66頭であり、操業期間は、日本海側沿岸で函館を基地として5月25日から6月30日まで、太平洋側沿岸で鮎川と和田浦を基地とし、各々6月20日から8月31日まで、オホーツク海側沿岸で網走を基地とし8月16日から8月31日までが許可された。合計63頭(函館沖10頭、網走沖2頭、鮎川和田浦沖51頭)が、5隻の捕鯨船(正和丸、第75幸栄丸、第28大勝丸、第7勝丸、第31純友丸)によって捕獲された。本漁業からのフィールドデータ収集は木白が組織し、5名の調査員(木白、盛田(水産庁)、豊田(水産庁)、原(水産庁)、田端(水産庁)が全捕獲物について生物調査と試料採取を行なった。北方型コビレゴンドウ(タツパナガ)の捕獲枠は36頭であり、操業期間は2隻の捕鯨船(第75幸栄丸、第28大勝丸)に対して11月11日から12月15日まで許可された。7頭が鮎川の捕鯨基地に水揚げされ、全ての個体を佐藤(水産庁)と川島(水産庁)が調査し、試料採取した。南方型コビレゴンドウ(マゴンドウ)についての小型捕鯨の捕獲枠も36頭であり、操業期間は5月1日から8月15日及び9月1日から9月30日まで許可された。合計10頭が2隻の捕鯨船(第7勝丸、正和丸)によって捕獲され、捕鯨基地(太地)に水揚げされた。全捕獲物について、原(水産庁)、中井(水産庁)、佐藤(水産庁)、盛田(水産庁)、木白が調査し、試料採取した。さらに水産庁は太地沖の5月1日から8月15日及び9月1日から9月30日までの小型捕鯨操業にハナゴンドウ20頭の捕獲枠を設定した。合計7頭を正和丸が捕獲し、原、中井、佐藤、盛田が調査した。2006年5-8月の太地においては、調査員は機会があれば突きん棒漁業の漁獲物も調査し、ハンドウイルカ59頭、ハナゴンドウ51頭、マダライルカ4頭、サラワクイルカ1頭(誤捕獲：計測のみで販売せずに廃棄された。)

から試料採取を行った。

木白と野村（水研センター）は、小型捕鯨が2006年5月から6月に函館で捕獲したツチクジラ10頭から胃内容物を採取した。盛田は、2005年10月から12月に鮎川の小型捕鯨によって捕獲されたタツパナガ7頭の胃内容物を記録した。

岩崎と同僚（南川、原（水研センター）及び斎野（水研センター））は、2006年11月1日から12月20日まで及び2007年1月7日から2月28日までの太地の追い込み漁業及び突きん棒漁業の漁獲物から生活史及び系群の研究に用いる試料を採取した。彼らはスジイルカ467頭、ハンドウイルカ401頭、ハナゴンドウ205頭、マゴンドウ109頭及びオキゴンドウ30頭の合計1,463頭を調査した。岩崎と斎野は、2006年10月北海道広尾沖においてイシイルカ型イシイルカ26頭の胃内容物と関連データ・試料を集めた。

遠洋水研の指導の下、水研センターとの契約に基づき岩手県において生活史及び系群の研究用試料採取が行なわれた。大友（岩手県水産技術センター）らは、リクゼンイルカ型イシイルカ18頭（2007年2月2-9日、岩手沖において）を調査した。2006年4月から2007年3月の期間、原、佐藤及び大友（以上、岩手県水産技術センター）が釜石魚市場に水揚げされたイシイルカのうちリクゼンイルカ型1,370頭、イシイルカ型393頭の体色型、性別、体長を記録し、イシイルカ型イシイルカ73頭のDNA試料を採取した。

沖縄県庁は、漁業者への指導監督の一環として石弓漁獲物マゴンドウ8頭の歯とDNA試料を集め、遠洋水研に送った。2006年12月13日に長崎県で混獲されたスナメリ1頭の皮膚試料が遠洋水産研究所に提供された。

4.3 座礁・漂着に由来するサンプル

漂着したスナメリ6頭（2006年11月及び2007年3月長崎県、2006年10月熊本県、2006年12月茨城県及び愛知県）及びハンドウイルカ1頭（2006年6月、熊本県）の皮膚試料が遠洋水産研究所に提供された。

4.4 解析及び技術開発

日本海のツチクジラの系群構造を解明するために、木白、豊田及び大泉は2006年に小型捕鯨によって函館で捕獲されたツチクジラの年齢、生殖器官及び胃内容物の分析を続行した。

遠洋水研は東海大学海洋学部と小型歯鯨類の食性に関する委託及び共同研究を継続し、大泉（東海大）と野村（東海大）は木白と共同で、2006年に函館の小型捕鯨で得られたツチクジラ10頭の胃内容物の分析を行った。大泉と渡部（東海大）、盛田は木白と2002年から2005年の10月から12月に鮎川の小型捕鯨で得られた北方型コビレゴンドウ（タツパナガ）75頭の胃内容物を用いて食性の共同研究を行った。

遠洋水研は東海大学海洋学部と小型歯鯨類の食性に関する委託及び共同研究を継続した。大泉と渡部（東海大）は木白と北方型コビレゴンドウ（タツパナガ）食性の共同研究を継続し、1999年および、2002年から2005年の10月から12月に捕獲された計96頭の胃内容物を分析した。大泉と野村（東海大）は木白と2006年5月から6月に函館の小型捕鯨業で得られたツチクジラ10頭の胃内容物を用いて食性の共同研究を開始した。大泉と高橋（東海大）は岩崎と1999年から2003年の5月から6月および、2月に太地の突きん棒漁業で得られたマダライルカ7頭とスジイルカ15頭の胃内容物を用いて食性の共同研究を開始した。大泉と馬嶋（東海大）は、木白と共同で2001年と2002年の7月から8月に千葉県沖で小型捕鯨業により捕獲されたツチクジラ47頭の食性の共同研究を開始した。

吉田は、コビレゴンドウの系群構造解明のため、1993-2005年に小型捕鯨業・石弓漁業で得られた75個体を加えさらなる遺伝子組成分析を進めた。また、スジイルカの系群構造解明を目的に、1994-2002年にバイオプシー採取により得られた58個体分の試料を加え遺伝子組成分析を実施した。

5. 汚染研究

2006年5月から2007年3月までに小型鯨類の汚染研究は実施されなかった。

6. 小型鯨類の統計

6.1 2006年1-12月の捕獲

| 種類 | 漁業種 | 都道府県 ¹⁾ | 頭数 ²⁾ |
|---------------|------|--------------------|------------------|
| イシイルカ型イシイルカ | 突きん棒 | 北海道 | 719 |
| | | 岩手県 ³⁾ | 3,312 |
| | | 宮城県 | 181 |
| リクゼンイルカ型イシイルカ | 突きん棒 | 北海道 | 44 |
| | | 岩手県 | 7,758 |

| | | | |
|---------|------|------|---------|
| スジイルカ | 突きん棒 | 和歌山県 | 36 |
| | 追い込み | 和歌山県 | 479 |
| マダライルカ | 突きん棒 | 和歌山県 | 5 |
| | 追い込み | 和歌山県 | 400(13) |
| ハンドウイルカ | 突きん棒 | 和歌山県 | 75 |
| | 追い込み | 和歌山県 | 285(80) |
| | 突きん棒 | 沖縄県 | 12 |
| ハナゴンドウ | 小型捕鯨 | 和歌山県 | 7 |
| | 突きん棒 | 和歌山県 | 105 |
| | 追い込み | 和歌山県 | 232 |
| タツパナガ | 小型捕鯨 | 宮城県 | 7 |
| マゴンドウ | 小型捕鯨 | 和歌山県 | 10 |
| | 突きん棒 | 沖縄県 | 56 |
| | 追い込み | 和歌山県 | 198(8) |
| オキゴンドウ | 突きん棒 | 沖縄県 | 5 |
| | 追い込み | 和歌山県 | 30(24) |
| ツチクジラ | 小型捕鯨 | 北海道 | 12 |
| | 小型捕鯨 | 宮城県 | 25 |
| | 小型捕鯨 | 千葉県 | 26 |

- 1) 小型捕鯨及び追い込みによる捕獲は水揚げ地に記録されている。また突きん棒の捕獲は、船籍地に記録されている。
- 2) 小型捕鯨の統計は、調査員及び漁業者の報告に基づいている。他の漁業の統計は、都道府県から水産庁への報告に基づいており、それらの報告は水揚げ伝票の集計（北海道及び岩手県の突きん棒）あるいは個々の漁業者あるいは漁業協同組合からの報告の集計（他の都府県）である。カッコ内は生体捕獲(内数)を示す。北海道沿岸における突きん棒漁獲物の一部は漁業者によって正肉として水揚げされ、50kgを1頭とする比率を用いて道県によってイシイルカ型イシイルカの頭数に換算されている(石川ら 1990)。

小型捕鯨業の対象種、漁期、捕鯨船、捕獲枠及び実際の捕獲頭数は、4.2.に示した通り。いるか漁業については、第52回IWC/SCに提出したプログレスリポートに説明してあるように水産庁は1996年に、イシイルカは8月1日に開始し翌年7月31日終了、他の鯨種は10月1日に開始し翌年9月30日に終了する新しい管理期間を導入した。2006年、水産庁は上記の管理期間を改め、和歌山県の漁業について9月1日から翌年8月31日とした。これは同県の追い込み漁業の漁期に9月が追加されたからである。しかしながらこれまで同様にIWCのプログレスリポートガイドラインに則り、捕獲統計は2006年1月1日から12月31日までを対象とする。なお、水産庁のいるか漁業の管理期間は上述の通りなので、暦年の捕獲頭数が見かけ上捕獲枠を超過しているケースがあるかもしれないが、管理期間内の捕獲は捕獲枠内に留まる。こうした小型鯨類の漁獲は、都道府県別、漁業種別に表に示してある。また統計データは各都道府県庁の報告に基づいて水産庁遠洋課が集めた。

2006/2007年漁期については、いるか漁業捕獲枠は前漁期と変更はなく、イシイルカ型イシイルカ9,000頭、リクゼンイルカ型イシイルカ8,700頭、ハナゴンドウ1,300頭（小型捕鯨業の捕獲枠20頭を含む）、ハンドウイルカ1,100頭、マダライルカ950頭、スジイルカ725頭、マゴンドウ450頭(小型捕鯨業の捕獲枠36頭を含む)及びオキゴンドウ50頭である。

2006年の県別操業期間は（2006年1-9月及び2006/2007年漁期10-12月）は次の通りである。いるか突きん棒漁業は沖縄県で9ヶ月（2月1日から10月31日まで）、和歌山県で8ヶ月（1月1日から8月31日まで）、青森県、宮城県、岩手県及び千葉県では6ヶ月（1月1日から4月30日まで及び11月1日から12月31日まで）、北海道では4.5ヶ月（5月1日から6月15日まで及び8月1日から10月31日まで）であった。いるか追い込み漁業については、和歌山県が1月1日から4月30日まで及び9月1日から12月31日までの8ヶ月であり、静岡県が1月1日から3月31日まで及び9月1日から12月31日までの7ヶ月であった。

6.2 2006年1-12月の非自然死亡

6.2.1 座礁・漂着した小型鯨類

| 種類・系群 | 頭数 | 死亡 | 連絡先 |
|-------|----|----|-----|
|-------|----|----|-----|

| | | | |
|---------------|-----|-----|-----|
| イシイルカ型イシイルカ | 5 | 5 | 水産庁 |
| リクゼンイルカ型イシイルカ | 11 | 11 | 水産庁 |
| ネズミイルカ | 4 | 4 | 水産庁 |
| スナメリ | 114 | 114 | 水産庁 |
| ハシナガイルカ | 1 | 1 | 水産庁 |
| マイルカ | 1 | 1 | 水産庁 |
| ハセイルカ | 3 | 3 | 水産庁 |
| カマイルカ | 19 | 15 | 水産庁 |
| スジイルカ | 6 | 5 | 水産庁 |
| ハンドウイルカ | 4 | 4 | 水産庁 |
| ハナゴンドウ | 6 | 6 | 水産庁 |
| シワハイルカ | 1 | 0 | 水産庁 |
| カズハゴンドウ | 136 | 136 | 水産庁 |
| マゴンドウ | 1 | 1 | 水産庁 |
| オキゴンドウ | 3 | 3 | 水産庁 |
| シャチ | 2 | 2 | 水産庁 |
| ツチクジラ | 4 | 4 | 水産庁 |
| オウギハクジラ | 5 | 5 | 水産庁 |
| ハブスオウギハクジラ | 1 | 1 | 水産庁 |
| コマッコウ | 6 | 6 | 水産庁 |
| オガワコマッコウ | 4 | 4 | 水産庁 |
| 種不明鯨類 | 21 | 21 | 水産庁 |

種類及び頭数は都道府県が水産庁に報告したものであり、漁業者、漁業協同組合および一般からの報告に基づいている。表中のカマイルカ 4 頭、スジイルカ 1 頭、マダライルカ 1 頭及びシワハイルカ 1 頭は救助され、水族館に運ばれた。表以外に、カズハゴンドウ 27 頭、シワハイルカ 1 頭、オガワコマッコウ 1 頭および種不明鯨類 1 頭が漂着もしくは港内に迷入したが、海に戻された。

6.2.2 船舶との衝突

2006 年に小型鯨類と船舶の衝突事例についての情報は得られていない。

6.2.3 漁業による混獲

| 種類 | 頭数 ¹⁾ | 都道府県 ²⁾ | 結果 | 漁獲対象種 | 漁業種 |
|---------|------------------|--------------------|----|-------|------|
| ネズミイルカ | 1 | 北海道 | 放流 | 不明 | 定置網 |
| ネズミイルカ | 1 | 京都府 | 死亡 | 不明 | 定置網 |
| スナメリ | 1 | 愛知県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| スナメリ | 2 | 山口県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| スナメリ | 2 | 福岡県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| スナメリ | 2 | 長崎県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| スナメリ | 3 | 大分県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| スナメリ | 1 | 鹿児島県 | 放流 | 不明 | 定置網 |
| ハセイルカ | 3 | 大分県 | 放流 | 不明 | 定置網 |
| ハセイルカ | 1 | 大分県 | 死亡 | 不明 | 定置網 |
| カマイルカ | 1 | 新潟県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| カマイルカ | 10(10) | 石川県 | 死亡 | 不明 | 定置網 |
| カマイルカ | 1(1) | 京都府 | 死亡 | 不明 | 定置網 |
| ハンドウイルカ | 1 | 東京都 | 死亡 | キンメダイ | 一本釣り |
| ハンドウイルカ | 1 | 島根県 | 死亡 | 不明 | まき網 |
| ハンドウイルカ | 1 | 熊本県 | 死亡 | 不明 | 刺し網 |
| ハナゴンドウ | 1 | 鹿児島県 | 放流 | 不明 | 定置網 |
| ハナゴンドウ | 1 | 鹿児島県 | 死亡 | 不明 | 定置網 |
| マゴンドウ | 2 | 三重県 | 放流 | 不明 | 定置網 |

| | | | | | |
|-------|---|-----|----|----|-----|
| シロイルカ | 1 | 北海道 | 死亡 | 不明 | 定置網 |
|-------|---|-----|----|----|-----|

- 1) カッコ内は生存個体であり、総混獲頭数に含まれている。
- 2) 漁具のある都道府県において記録した。

6.3 過去の統計

過去の統計の修正はない。

7. 座礁・漂着

座礁・漂着した鯨類の情報は公式に水産庁遠洋課（100-8907 東京都千代田区霞が関 1-2-1）が収集した（表 9）。また、日鯨研（104-0055 東京都中央区豊海 4-18 東京水産ビル）及び山田（169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館）も自主的に座礁漂着に関連した情報を収集している。

8. 小型鯨類についてのその他の研究・分析

対象期間に上記以外の小型鯨類研究はなされていない。

9. 引用文献

石川創、藤瀬良弘、斎野重夫、銭谷亮子 1990. III. オホーツク海及び三陸沖海域での突きん棒船乗船調査 53-78. 平成元年度日本周辺イルカ生物調査報告書、財団法人日本鯨類研究所

10. 論文公表

10.1 公表済みあるいは印刷中の論文

- Hayashi, K., Yoshida, H., Nishida, S., Goto, M., Pastene, L. A., Kanda, N., Baba, Y., and Koike, H. 2006. Genetic variation of the MHC *DQB* locus in the finless porpoise. *Zoological Science* 23: 147-153.
- 岩崎俊秀 2007 水産総合研究センター交付金プロジェクト研究「大型海洋動物の衛星追跡とその技術開発」遠洋リサーチ&トピックス 2: 5-6.
- 岩崎俊秀 2007. 小型鯨類の漁業と資源調査（総説） p144-9. In 武藤文人編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 229pp.
- 岩崎俊秀 2007. イシイルカ p.150-1. In 武藤文人編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 229pp.
- 木白俊哉 2007. ツチクジラ p152-3. In 武藤文人編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 229pp.
- 木白俊哉 2006. ハクジラ類の資源管理に向けて-ツチクジラの系群識別- FRA ニュース.Vol.7. p26
- 宮下富夫 2006. シャチ p166-7 In 武藤文人編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 229pp.
- Okamura, H. Minamikawa, S. and Kitakado, T. 2006. Effect of surfacing patterns on abundance estimates of long-diving animals. *Fisheries Science* 72(3): 631-638.
- Watanabe, N., Hatano, J., Asahina, K., Iwasaki, T. and Hayakawa, S. 2007. Molecular cloning and histological localization of LH-like substances in a bottlenose dolphin (*Tursiops truncatus*) placenta. *Comparative Biochemistry and Physiology, Part A* 146:105-118
- 吉田英可 2007. スナメリ p164-5 In 武藤文人編 *国際資源の現況* 水産庁・水産総合研究センター 229pp.

10.2 未公表の論文

- 岩崎俊秀・南川真吾 2006 衛星追跡によって得られた小型鯨類の地理的移動様態 第2回日本バイオリギング研究会シンポジウム in 2006 「宇宙から見たクジラの水中共生」講演要旨集 p7-8
- 木白俊哉・南川真吾 2006 南西部日本沿岸におけるニタリクジラの衛星追跡 第2回日本バイオリギング研究会シンポジウム in 2006 「宇宙から見たクジラの水中共生」講演要旨集 p11-13
- 南川真吾・岩崎俊秀・木白俊哉 2006 深度時系列データからみたハクジラ類（ツチクジラ、スジイルカ、オキゴンドウ）の潜水パターン 第2回日本バイオリギング研究会シンポジウム in 2006 「宇宙から見たクジラの水中共生」講演要旨集 p.9-10
- Miyashita, T. 2006. Large cetacean distribution and ecology in the North Pacific. Abstract for the symposium on the cetacean research collaboration in the western North Pacific, Cetacean Research Institute, National Fisheries Research and Development Institute, Ulsan, Korea, November 2006.
- Miyashita, T. 2006. Japanese sighting survey activities and the results of surveys with special reference to the Sea of Okhotsk. Abstract for Symposium on the Cetacean Research Collaboration in the western North Pacific, National Fisheries Research and Development Institute, Ulsan, Korea, November 2006.
- 鈴木美和・中野雄一・高井則之・木白俊哉・朝比奈潔(2007): 鯨類の尿浸透圧の種間差と腎臓の構造および AQP2 分布、餌生物種との関係に関する予備的研究. 平成 19 年度水産学会春季大会講演要旨集.

- 渡部陽、大泉宏、盛田祐加、木白俊哉(2006) 秋季に三陸沖で捕獲されたコビレゴンドウ (*Globicephala macrorhynchus*) の食性. p42. 日本哺乳類学会 2006 年度大会講演要旨集.
- Yoshida, H. 2006. Studies on stock structure of finless porpoises in coastal waters of Japan and recent works. Abstract for the symposium on cetacean research collaboration in the western North Pacific, Cetacean Research Institute, National Fisheries Research and Development Institute, Ulsan, Korea, November 2006.